床や談義　ルデヤ通信　第183号　2023.6.4

[私版イスラエル建国史講議録](1)

「建国を可能にした"ユダヤ魂"とは…マサダとヤブネが示すもの」

田井 勲

[現代イスラエル史を学んだ経緯] 僕が卒業した神学校で「イスラエル史」を講議してほしいと依頼されたのは2005年だったと思う。3時限の授業を2日で行う。50分のクラスを6回するという。イスラエル史をひとことで言うが4千年の歴史を6時間で話すのはとてもむりである。たとえしたとしても中味がとても薄いものになってしまうだろう。この神学校では66巻の聖書を各々全部学ぶのを旨としている。旧約聖書はそのままイスラエル史でもある。これを通史として学ぶのは、それなりに意味がある。しかし、晩年になった僕が、自分なりに納得して話せるのは、現代イスラエル史「建国物語」だと気づいた。それは70年に古代イスラエル王国がローマ帝国によって滅ぼされ、イスラエル人(ユダヤ人)は全世界に散らされた。それから1878年後の1948年にイスラエル国として建国された。言わば古代の国が不死鳥のように復活したのである。これを講義することに決めた。僕がなぜイスラエル現代史に関心があったか、その経緯を話そうと思う。僕が最初にユダヤ人について知ったのは高校に入ったばかりの時、近所の貸本店で借りて読んだ、フランクル(1905-1997)著の「夜と霧」であった。オーストリアの精神医学者で、ナチスによるアウシュビッツの体験を記したもので、僕が衝撃を受けたのは、その本に付けられた生々しい写真録であった。ガス室で殺された死体の山、ミイラのように餓死寸前の人々はもとより、ナチスがユダヤ人の皮膚で作った電気スタンドの笠、死体の脂肪から作った石けん、等々の写真を見て、人間はこれほど残酷になれるものなのか怖気を振ったのを憶えている。そして6百万人ものユダヤ人がなぜ絶滅されなければならなかったのか疑問が当然生れた。僕は早稲田大学文学部、西洋史学科で学んだ。クラス担当の教授は、小林正文先生で、現代イスラエル史が専門の教授で、その先生による「シオニズムの思想」と云う部厚い英文の本による授業で、初めて現代イスラエル史を学ぶことになった。4年生になると卒論が大きな課題になった。僕は聖書考古学という、その頃では新しい分野について研究し、その指導教授が小林先生であった。古代イスラエル史をテーマとするものだったので小林先生も喜ばれ、指導を受けるために先生の御自宅にも何度か呼んで頂いたことがあった。僕がキリスト者だと知って先生は小林先生も属しておられた、まだ生れたばかりの「イスラエル文化研究会」に入会するよう推められ入会した。三笠宮殿下を名誉会長として、大学教授や著名な文化人、キリスト教会の有名な牧師たちが綺羅星の如く連なる末席に座らせて頂いた。年に数回の研究発表会があり講演会があった。まだ耳新しい「キブツ」だとか、現代イスラエル史に関する事柄を学ばせて頂いた。卒業し、床や業に専念しながらも、「ユダヤ・イスラエル問題」に関心を持ち続けていた。

山本七平氏が イザヤ・ベンダサンと云うユダヤ人の筆名で発表した「日本人とユダヤ人」は、当時のサラリーマンの間で読まれ、ベストセラーになった。戦後初の比較文化論だった。ユダヤ人という視点から日本文化や日本人を論じたのがとても目新らしかった。日本人とユダヤ人は色々似た点が多かった。日本は長い間鎖国主義に隠れていたので、明治維新で遅れて19世紀末に国際世界に出て来た。一方ユダヤ人も、長い間差別され、「ゲットー」に追いやられていたのがフランス革命以来やっと世界に出て来た。両者とも新参者同志であった。巨大な敵に無鉄砲に挑み、自滅した事も共通している。そして「お祭り」を大切にし、伝統文化を守って来たのも共通している。しかし、異っている点も多々ある。山本氏は、みごとな表現でそれを示した。例えば、「安全と水とは日本人にとって、当り前に在るもので、常に無料だと思っている。しかし、ユダヤ人にとって、それらは犠牲を払って手に入れるほど高価なものである」とか、「日本人は、四方を海に囲まれ、外敵の侵略もなく、ぬくぬくとおっとり育った坊ちゃんのようだが、ユダヤ人は荒野に棄てられた孤児のようなものだ」と云う表現だとか、日本人は、同質的で和を尊ぶことから周りの人のようすをうかがい、全員一致の原理で物事を決めていく。ユダヤ人は群れるのを嫌い、個として考え、甘えることをしない。意見が互いに違うのは当り前で、反対がある多数決原理で、物事を決める、「全員一致」は誰かの扇動があったと疑うという。「イスラエルでは三人が会すると四つの党派が出来る」というジョークがある。

[イスラエル旅行で感じたこと] 僕が神学校で、この授業をしようと自信を持てたのは、'99年の春に聖地ツアーに参加して、イスラエルを見聞したことが大きかったと思っている。すでに、この国がどのようにして出来たかを学んでいたので、多くの仲間たちは、聖書のイエスの事跡を見学するだけだったが、僕としては今のイスラエル国がどのように機能して在るのか、この目で見ようとしていたので、その見聞する要点が多枝に渡っていたと思う。僕がイスラエルの空港に着き、その地を踏んで最も感動したのは、空港からエルサレムへ向うバスに乗っ

たときであった。ガイドをしてくださったヘブライ大学講師の名村女史とバスの運転手とが流暢に話しているのが現代ヘブライ語だと分った時だった。他の方々はそんな当り前の事に何の感慨も涌かないのである。そしてその晩僕らが泊ったエルサレムの宿舎の前の通りが「ベン・エフーダ通り」だった事も、僕は大いに感動したのである。この通りにその名が冠されたエリエゼル・ベン・エフーダ（1858-1922）こそ、このイスラエル国が出来る基礎を作った人だったからである。**［現代ヘブライ語の父・ベン・エフーダ］**彼は、ロシア領だったリトアニアの一寒村に生れた。わけあって裕福なヨナス家の養子になった。彼は幼少時より語学の天才で数ケ国語を使いこなせた。そして死語となっていたヘブル語を復活しようと、それに生涯をかける決心をした。ヨナス家の長女デボラと結婚し、トルコの支配するパレスチナに渡る。新婚の誓いは、生涯ヘブル語以外話さないと言うものであった。生れてくる子供たち、家族ぐるみでヘブライ語布及に努め、ヘブライ語新聞を発行し、新しいヘブライ語を創っていき、生涯をかけヘブライ語辞典16巻を完成させた。ユダヤ人は、70年の大崩壊後、全世界へと離散し、移った土地の言語とヘブル語は習合して独自のことばを作って行った。ドイツ語と習合したのがイーディシュ語であり、スペイン語と習合したのがラディノ語と云った。パレスチナで全世界から戻って来たユダヤ人たちが各々住んでいた国語で話しても通じない。聖書の創世記に「バベルの塔」の物語がある。古えの人々が自分たちの文明を誇って、天まで届くようにと高い塔を作り出した。怒った神は、一つの言葉で話した言葉を混乱させ、各々異る言葉を話すようになり、その事業は頓挫して、人々は世界へ散って行き多くの言語が出来たと言う。イスラエル建国ではその真逆の事が起きた。異った言語の人々がヘブル語という一つの昔の言葉に帰り、一つの大事業を成したわけである。初期のパレスチナでは、英語、ロシア語、アラビヤ語が共通言語として使われていた。やがてベン・エフーダの努力が実り、古代の聖書のことばヘブル語が現代語の共通語として使われ出し、国語となって、生れて来る子供たちに教えられ、学校で使われ、生活のことば、戦う兵士のことばとなり、僕が聞いたヘブル語になったのである。**［ちょっと考えて見よう］**古代イスラエル王国が滅んだ70年は、日本では、まだ弥生時代であった。7世紀の日本に、朝鮮半島で百済国が滅び、多くの亡命者が日本へ渡来し、やがて日本人の一部となって行った。かりに、その百済国をイスラエル国に置き代えて見ると、その百済国が現在の朝鮮半島に復活するとすれば、どんな事が起ったか。そんなことが起り得るだろうか。今の日本にも百済の文化が、例えば百済観音とか雅楽の一部に、その形のかけらが残ってはいても、百済語を話す人々がいるであろうか、百済としての自覚（アイデンティティ）を持つ者が残っているだろうか。百済人の自覚を持った人々が世界各地に居たとして、何世紀に亘って在り続け、彼らが居た同じ所に建国するというのは、ただの妄想にすぎないと言われることであろう。そう考えると70年に滅んだ国を2千年もたった後に、そのユダヤ人としての自覚を持ち続けた人々が、当時の言語を復活させ、同じ所に国を再建するなど奇跡に近い事だと分るのである。**［そのユダヤ魂とも言うべき原点はどこにあるのか］**イスラエル旅行でもう一つ印象的なことがあった。それは「バル・ミツバ」と言うイスラエルの成人式の祭りに遭遇したことである。ユダヤ人は、男は13才、女は12才になると成人と見なされ盛大な祝賀がある。日本の元服式に当るものだ。それはイスラエル唯一の聖所と言うべき「嘆きの壁」の前で行われる。13才になった少年たちが壁に向って「巻物のトーラ」（聖書の律法）を朗読する儀式である。男子だけで行い、女性は別の区画でこれを祝福する。この壁はオープンで観光客にも解放されている。僕たちもそこで祈ることができる。重々しくひげ面の老人が厳かに孫のような少年に儀礼を教えていた。ある人々は各々の民族衣装で正装して、ラッパを吹きながら入場して来る姿もあった。とにかく厳粛な中にも喜びが満ちている。僕は、イスラエル復活の原因がここにあると思った。ユダヤ人は教育をキーとする。それは子供時代に聖書や「タルムード」（宗教や生活の百科事典）に基ずく教育を徹底して行う。それによって養われるユダヤ人の智性は高い。ユダヤ人が世界に占める人口率は0.2%にすぎない。しかしノーベル賞受賞者の23%がユダヤ人である。家庭生活の円満さは世界で群を抜いている。イスラエルを再建することが出来たのは、とてつもないマンパワーがあった。それを「ユダヤ魂」と言ってよいと思う。それを象徴する二つの事跡が、古代すでにあった。それは70年のユダヤ戦争のとき、（マサダ）、女子供を含む千人がマサダ砦にたてこもりローマ軍に徹底抗戦し、3年持ちこたえたが全員玉砕した。（ヤブネ）もう一つはエルサレムがローマ軍に包囲されていたとき、敗北をさとった高名な一人のラビが棺に入って城外に脱出して、ローマ軍のティトス将軍に面会した。彼はユダヤ滅亡の後にも民族が在続できるよう、教育の場を残してほしいと嘆願した。皇帝になったティトスはその誓いを果たし、ヤブネという土地をユダヤ人に与えた。そこのユダヤ学校は、その後もずっと続き、マサダは独立戦争で発揮され、ヤブネの精神は今もユダヤ人を支えている。